

平成19年(昭和82年)1月16日(火)

東海の古代

第 79号 編集・発行 古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川1-729

ホームページ: (「古田史学」で検索しても見つかります)

<http://geocities.jp/furutashigaku-tokai>

メール: frrttokai@zm.commufa.jp

電話/FAX(カラー可) 052(936)5012

郵便振替 00870-5-30752

あけましておめでとうございます。

前号でつまらない駄文を並べたところ、早速厳しいご指摘をいただきました。現在の台湾に新高山は無い、と。確かにそうです。

現在は玉山(ユイシヤン、モリソン山とも)と呼ばれ、その周囲約10万ヘクタールが玉山国家公园に指定されています。しかし、かつて日本が台湾を占領し、明治天皇がこの山を新高山と命名したという史実を日本人が忘れ去っていいはずもありません。次の世代へ日本人の歩みを語り継ぐ、そういう義務を誰もが負っていると私は思います。

今年も九州旅行に行きたいですね。福岡県と佐賀県にはすでに行きました。大分県を中心にするのはどうでしょう。宇佐八幡神宮は外せません。御所ヶ谷や唐原神籠石も注目です。じっくりと検討していきたいものです。

王の姓？

日本書紀には本当に不思議な記事があふれています。正月の行事をめぐって奇妙な一節があるのをご存知でしょうか。

八年の春正月の壬午の朔……戊子(七日)に、詔して曰はく、「凡そ正月の節に當りて、諸王・諸臣及び百寮は、兄、姉より以上の親及び己が氏長を除きて、以外は拜むこと莫。其の諸王は、母と雖も、王の姓に非ずは拜むこと莫。凡そ諸臣は、亦

卑母を拜むこと莫。正月の節に非ずと雖も、復此に准へ。若し犯す者有らば、事に随ひて罪せむ」とのたまふ。(天武紀)

さっぱり意味がわかりません。正月の行事として目上の者に挨拶することは当然だと思うのですが、天武は実に奇妙な制限を、わざわざ詔勅で行っています。その内容も理解しがたいものです。

「卑しい母を拜むな」とは何事でしょう。さらに正月の節以外も駄目だということです。孔子に叱られます。お前は誰のおかげで大きくなった、と日本中の母親から抗議が殺到しなかったのでしょうか。

しかも正月を過ぎてからの禁止令です。どうしろというのでしょうか。やり直せ、とでもいうのでしょうか。

また「王の姓」とは何でしょう。近畿天皇家には姓がない、というのが定説です。これも何を意味するのでしょうか。天皇家ではないが、「王」がいるということでしょうか。しかしそれは律令のきまりに反します。岩波本にも説明はありません。

九州王朝の代表者には姓がありましたよね。「イ妥王、姓は阿每、字は多利思北狐」はあまりに有名です。

この詔勅は本当に天武が出したのでしょうか。九州王朝と大和王朝のせめぎ合いから生まれた記事のような気がします。誰か続きを考えていただけませんか。

2月例会に参加を

日程：2月11日(日)午後1時半～5時

場所：名古屋市市政資料館第1集会室(2階)

名古屋市東区白壁1の3(名古屋拘置所南)

地下鉄名城線「市役所」下車、東へ徒歩8分

名鉄瀬戸線「東大手」下車、南へ徒歩5分

市バス「市政資料館南」下車、北へ徒歩5分

〃 「清水口」下車、南西へ徒歩8分

〃 「市役所」下車、東へ徒歩8分

一応、駐車場有(無料)12台収容

南隣にウィルあいち(愛知県女性総合センター)／地下駐車場30分170円

参加費：500円(維持会員は無料)

今後の予定

3月例会：3月11日(日)(市政資料館第1)

4月例会：4月8日(日)(未定)

例会はなるべく毎月第2日曜日に固定したいので会場をしばしば変更することになりました。会場により開始・終了時刻も変わります。よく確認してからお出かけください。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻早退もかまいません。

例会の場での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合はなるべく16部用意願います。

『なかつた 真実の歴史学』第2号発刊

昨年末、古田先生直接編集『なかつた 真実の歴史学』第2号がミネルヴァ書房より発行されました(定価2200円+税)。第2号も盛り沢山の内容で読み応えがあります。古田先生による論稿や講演録も下記の9編が掲載されています。

- 序言
- 三つの学会批判
- 九州王朝の門柱(太宰府)
- 九州年号の木簡(芦屋市)
- 「国引き神話」の新理論(ウラジオストク)
- 太田覚眠と「トマスによる福音書」 第1回
- 古田による古代通史 第2回
- 敵祭—松本清張さんへの書簡 第2回
- 中言
- 高校生への回答—中島原野君へ
- 先輩への御回答—浅野雄二さんへ
- 末言
- また下記の論文なども掲載されています。
- 渡嶋と肅慎について—渡嶋は北海道ではない
合田洋一(古田史学の会全国世話人)
- 神武が来た道(第1回)
伊東義彰(古田史学の会会計監査)
- 太陽の娘ヒミカ(漫画)
古田武彦監修・深津栄美作・おおばせつお画

古田語録

正月はすでに八十歳を迎えられた古田先生の三部作を、初心に戻って読み直すところから始められるのはいかがでしょうか。何度読み返しても新たな示唆を得られます。以下は文庫版の前文の抜書きです。

「邪馬台国」はなかつた

偶然は、人を思いがけないところへ導くものである。

わたしは二十代・三十代を通して、夢にも思いはしなかつた——古代史の草むら深くわけ入って、古い書物の中に書かれている、人のだれも通つたことのない道を通る、そしてある日、思索のもやが晴れ、突然そこに三世紀女王国の壮麗な都のありかを眼前にする——そのようなことが私自身におこるとは、およそ想像したこともなかつたのである。

失われた九州王朝

日本の古代史は、虚構の脊柱に貫かれてきた。いま、前二世紀から七世紀にいたる火山列島の歴史をいっせいに噴火し、連鎖反応のように内部の真実は爆発しはじめている。わたしはそれを観察し、分析し、そしてここに記録したのである。

盗まれた神話

きのうまで、神話は遠い彼方にあつた。時の霧によって神格化され、あいまいさがその一帯を支配していたのである。だが今はちがう。

神々はどこから来て、どこを通過してどこまで言つたか、また天皇家の祖先はどの地点からどのようにして来たか、その一つ一つの道順がハッキリとわたしの目に焼きついている。あたかも自分の掌にはしる幾筋もの線をじっと見つめている時のように。

歴史の真実への認識を次世代に引き渡す、その作業はまだ始まつたばかりのように思われます。

